

W2の深度48~50m, 71.5~73mの大阪層群の花粉分析の結果と火山灰層序の検討より, 相楽丘陵の大阪層群は大阪層群下部であると考えられる(図2-6-37)。

段丘堆積物には, 高位段丘と中位段丘のものが識別される。

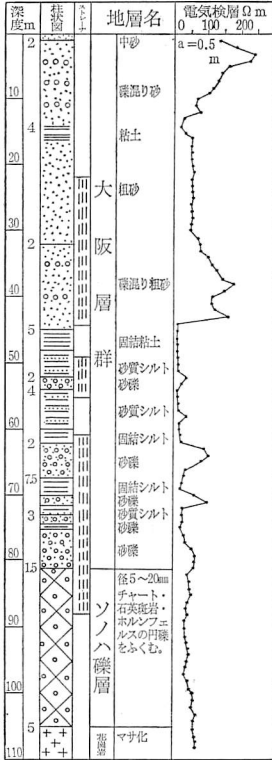


図2-6-37 W2柱状図

揚水量は 26 m<sup>3</sup>/d と小さい。ソノハ礫層は比較的良好に膠結されているため難透水層と考えられる。

水質分析の結果(図2-6-38)をみると, さく井W3, W6, W7は, 地表水301に比べアルカリ度とNaの濃度が高い。浅井戸101ではSO<sub>4</sub>, NO<sub>3</sub>が, また浅井戸102ではNaClがきわめて高い濃度を示している。

(清水欣一)

参考文献

- (1) 粉河昭平 (1954): 奈良三笠山附近の地質——特に火山活動の年代について, 地質雑, Vol. 60, No. 710
- (2) 近畿農政局 (1976): 農業用地下水調査開発調査相楽地区調査報告書
- (3) 清水欣一・川崎 敏 (1976): 京都府相楽丘陵の水理地質, 応用地質 Vol. 17, No. 2, p. 11~17
- (4) 清水欣一: 地下水盆の安全揚水量を試算する簡便な方法, 陸水, Vol. 42, No. 3, p. 123~130

12. 丹波高原

京都府船井郡一帯の, いわゆる丹波高原と呼ばれる地域には, 樹枝状の谷底平野が広がり, 低

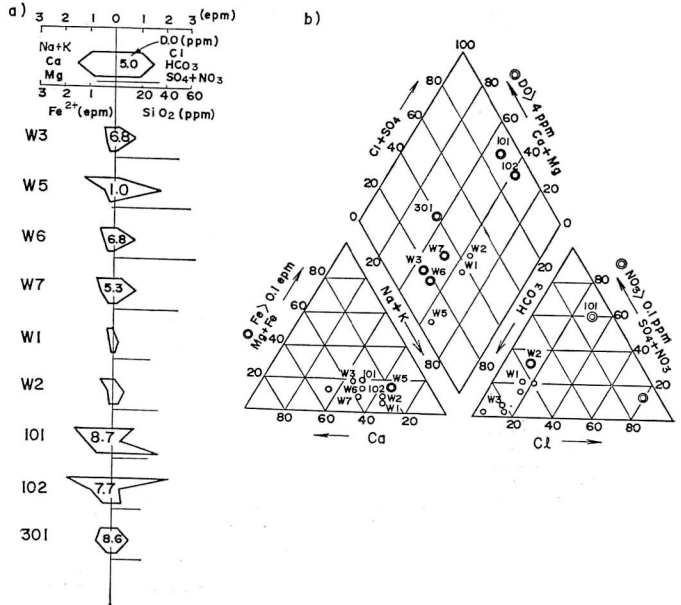


図2-6-38 相楽丘陵水質組成図

相楽丘陵の地下水について, いままでほとんど明らかにされていない。110~120mの深井戸の揚水量は700~1,000 m<sup>3</sup>/dであるが, 大阪層群が薄く, ソノハ礫層の厚いところでは,

平地や周辺丘陵には、第四紀の堆積物が分布し、その一部に良好な帯水層を形成している。

山陰線胡麻駅周辺は由良川水系と桂川水系の分水界付近であるが、桂川水系の支流である胡麻川の最上流部で、層厚約 35 m の未固結堆積物の存在することが明らかにされ、しかもその砂礫層から水位降下量わずか 1 m 余りで 1,200 m<sup>3</sup>/d の地下水採取が可能になっている。

地形や堆積物の分布をみると、旧胡麻川はもっと西北方に流域をもっていたが、その後由良川によって奪われたものとみられる。

丘陵部では風化が進み、堆積物も薄く、地下水開発の可能性が低いと考えられる。

(宮島吉雄)

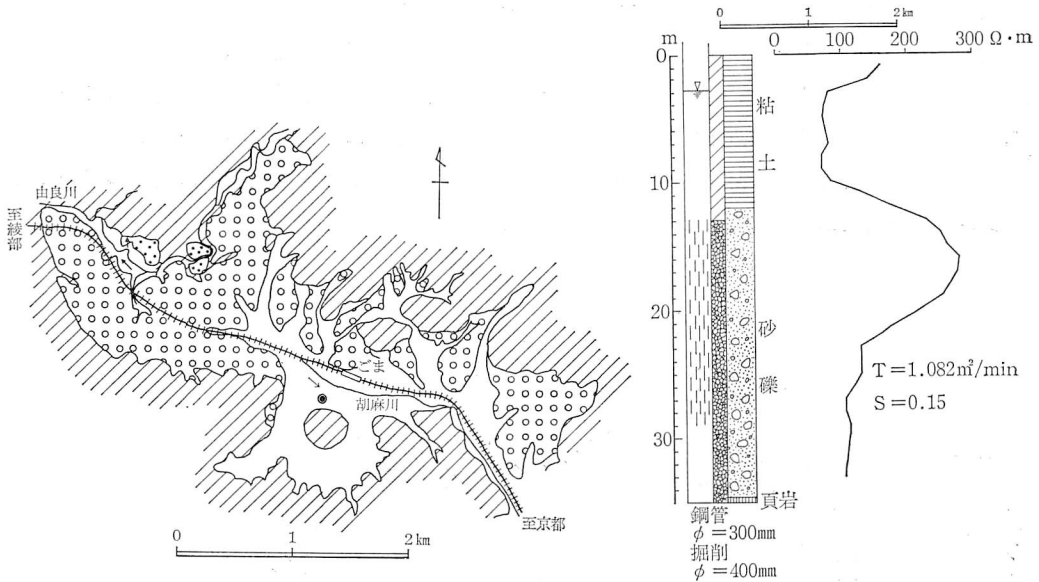


図2-6-39 丹波高原地質概要図

### 13. 夜久野高原

#### (1) 地形・地質

田倉山は、丹波山地の北西端に位置する小さな第四紀の円錐形火山であり、その南麓にはほぼ東西に伸びる玄武岩台地を伴う。この台地は夜久野ヶ原と呼ばれている。

田倉火山は標高 349.7 m でかなり開析が進み、その中央には径 120 m 余り、深さ 30~40 m の火口とみられる凹地があって、その南部は開口している。

台地は、幅 0.5 km 前後、長さ 4.4 km 余りで、東西方向に長く、上下 2 段に分かれる。上位の台地は、標高 190~210 m で、西に高く、東に向かって緩傾斜している。その山腹には、径 30~80 m、高さ 5~15 m の円丘が十数個分布している。下位の台地は 150~170 m であり東部に発達する。

田倉火山の基盤と周辺の山地は、中、古生層である砂岩、粘板岩、チャートのほか、はんれい岩、花崗岩、流紋岩などの火成岩類からなっている。